

日本学術会議 北海道地区会議ニュース

発行 日本学術会議北海道地区会議

No. 45
2015-3

第23期北海道地区会議代表幹事

(北海道大学理事・副学長)

上 田 一 郎

日本学術会議北海道地区会議第23期(2014.10～2017.9)代表幹事を引き受けました。不慣れでございますが、北海道地区の科学者間ネットワークの構築と学術成果の公開等に微力ながら一生懸命努めさせていただきますので、よろしくお願いします。

日本学術会議は、我が国の科学者の内外に対する代表機関として、科学の向上発達を図り、行政、産業及び国民生活に科学を反映、浸透させること目的として1949年に設立されました。現在は、中央官庁等改革を経て内閣府のもとに置かれており、内閣総理大臣より任命された210人の会員と学術会議の会長より任命された約2,000人の連携会員で構成されております。組織的には、人文・社会科学系、生命科学系、理学・工学系の3部で構成され、我が国の約84万人の科学者を代表しています。今期は前期に引き続き、豊橋技術科学大学学長 大西 隆先生を会長として、向井千秋宇宙医学研究センター長、井野瀬久美恵甲南大学文学部教授と花木啓祐東京大学工学部教授を新たな副会長とした体制で第23期がスタートしました。部のもとに置かれている30の分野委員会と部横断的に構成される4つの機能別委員会、さらに臨時に設立される課題別委員会を通じて活動し、政府・社会等に対する提言、各国アカデミーとの交流等の国際的な活動、科学の役割についての普及・啓発、科学者間ネットワークの構築を行っております。

また、科学者間ネットワーク構築の一環として、全国を7つの地区に分けて、地区会議を組織し、学術講演会や地域の科学者との懇談会などの活動を行って

り、北海道地区もその一つとして活発な活動を行ってきました。前期は野口 伸北海道大学農学研究院教授が地区代表幹事として年1回の地区学術講演会に加え、地区会議懇談会とサイエンスカフェを開催してまいりました。今期の北海道地区会議は北海道に在住する会員6名と連携会員58名で活動します。

基本的には、今までと同様に、市民公開学術講演会とサイエンスカフェを中心として、学術成果の市民への還元や、科学者と市民の対話の活動を行ってまいります。また、学術会議の広報誌である「学術の動向」にも北海道地区の活動から成果を掲載していく予定です。

学術会議の会員、連携会員には、科学者自身の学問の世界に閉じこもることなく、利害関係から離れて科学者から見た公平な見解と判断を社会に発信してゆくことが求められます。これらは、学術会議の「提言」としてまとめられたり、公開学術講演会のかたちで発信されます。例えば、東北・関東大震災の時には、科学者として「いま我々にできることは何か？」をテーマに提言や見解を公表してきました。あるいは、一連の科学研究における不正行為が問題になった時には「科学者の行動規範－改訂版－」を公表したり、提言を出したりしています。北海道地区においても身近な問題を含めて今後発信してゆきたいと思います。高齢化社会の到来と医療、世界の食料や環境の問題、新興感染症や今までに日本で発生していなかった感染症のこと等、皆さんと考えていかなければならないことはたくさんあります。

また、北海道地区は、広い地域をカバーしますが科学者間のネットワークは他の地域に比べて緊密だと思っています。58名の連携会員の先生方にもできるだけ地区の活動に参加していただけるよう学術講演会を組んで行きたいと思っています。皆様のご協力とご支援をよろしくお願いいたします。

第 22 期北海道地区会議の活動を振り返って

第 22 期北海道地区会議代表幹事

(北海道大学大学院農学研究院・教授)

野 口 伸

2011 年（平成 23 年）10 月から 2014 年 9 月まで、3 年間に渡って北海道地区会議の代表幹事をさせていただきました。地区会議は、地域からの学術会議に対する意見、要望を汲み上げて日本学術会議と科学者との意思疎通を図るとともに、地域社会の学術の振興に寄与することを目的として設置されています。地区会議は北海道、東北、関東、中部、近畿、中国・四国、九州・沖縄の 7 つの地区に組織されています。北海道地区会議は北海道に在住する会員・連携会員によって構成され、毎年市民公開講演会とサイエンスカフェ（市民と科学を語る催し）を開催しています。第 22 期は講演会 3 回（帯広 1 回、札幌 2 回）、サイエンスカフェ 5 回（旭川 1 回、札幌 4 回）を企画しました。サイエンスカフェについては、北海道大学高等教育推進機構 科学技術コミュニケーション教育研究部門（CoSTEP）や三省堂書店札幌店と共催で行い、多くの市民に参加してもらいました。他方、市民公開講演会の第 1 回目は平成 24 年 9 月 28 日に帯広畜産大学（帯広市）で『食の安全とレギュラトリーサイエンス』と題して開催しました。食品分野のレギュラトリーサイエンスの概念と役割に関する講演やパネルディスカッションを通して、レギュラトリーサイエンスの意義・役割について情報提供と意見交換が行われました。第 2 回目の講演会は『アフリカに暮らす人たちとその環境－北の大地からアフリカへの貢献－』を平成 25 年 3 月 1 日に北海道大学（札幌市）で開催しました。科学者を対象にした第 1 部と市民対象の第 2 部の構成でした。第 2 部の「学術はどのようにアフリカに貢献しようとしているか」では、アフリカの環境や

人々の生活に関するこれまでの研究成果について講演がありました。その後のパネルディスカッションでは、「学術のチャレンジの方向性と展望」をテーマに科学技術の側面からアフリカへの貢献について総合的な議論がなされました。最後の第 3 回目の講演会は平成 26 年 3 月 13 日に北海道大学（札幌市）で『宇宙技術による“夢”の実現』でした。衛星システムによる通信、リモートセンシング、測位、天気予報などは私たちの生活の基盤です。その宇宙技術がわれわれ人類に与えてくれる「物質的な豊かさ」と「心の豊かさ」について市民の皆さんと一緒に学びました。

以上のように第 22 期の活動は地域社会における学術の振興を主眼に行ってきました。一方、残念ながら第 22 期の地区会議が果たせなかった役割もあります。それは地区会議として政府に対する意見具申です。21 世紀の科学のあり方について 1999 年の ICSU（国際科学会議）とユネスコ（国連教育科学文化機関）の共催で開かれた世界科学会議で「科学と科学的知識の利用に関する世界宣言」いわゆるブダペスト宣言が採択され、“Science in society and science for society”すなわち、科学と社会のかかわりの強化が宣言されたのは皆さんご存知の通りです。日本学術会議ではその“Science for society”に加えて“Science for policy”という科学のあり方が示されました。“Science for policy”とは政策のための科学という意味ですが、科学に裏付けされた政策提言の表出は、科学的知見の間接的な活用であり、その社会に与える影響は極めて大きいことはいうまでもありません。北海道は他の都府県と異なる地理環境を有した地域であり、そこで展開している科学・技術には特色があります。北海道の地理的条件から創起される科学技術に関する提言を政府に表明することは重要です。地区会議にしかできないことでしょう。第 23 期では第 22 期でやり残した活動を含め、様々な視点からの活動に期待したいと思います。3 年間ありがとうございました。

学術講演会開催報告

北海道地区会議では、市民公開の講演会を毎年開催しています。

平成 26 年度は、11 月 14 日（金）に開催し、学生、大学関係者、行政関係者、一般市民等多数の方にご参加いただき、盛況のうちに終了しました。以下に当日の講演内容を報告します。

「第14回北海道地区会議学術講演会高齢化 社会の食と医療～心身の健康のために～」

日時：平成26年11月14日（金）13：30～17：20

場所：北海道大学学術交流会館・小講堂

報告：北海道地区会議運営委員会委員

（北海道大学大学院医学研究科・特任教授）

本 間 さ と

はじめに

我が国は、これまでどの国でも経験したことのないスピードで高齢社会に突入している。WHOの定義では、65歳以上の人口の割合が全人口の7%を超えると高齢化社会、14%を超えると高齢社会、21%を超えると超高齢社会とされる。2013年10月の統計によると、我が国の65歳以上の人口割合は25.1%であり、すでに「超高齢社会」に突入している。高齢化の速度については、高齢化率が7%を超えてから14%に達するまでの所要年数を比較すると、フランスが115年、スウェーデンが85年、イギリスが47年、ドイツが40年であるのに対し、日本は、1970年に7%を超えてからわずか24年後の1994年に14%に達している。さらに2007年には75歳以上の人口の割合が10%を超え、程度、速度のいずれにおいても、世界に例のない高齢化を遂げている。10年以内には人口の30%を超えると予測されている高齢者数の急増と高度先進医療の普及は医療費を圧迫し、労働人口の減少で、高齢者1人を支える労働者数が2名に満たない時代が数年後に控えている。この高齢社会に、いかに健康で自立した生活が続けるかは、国民一人一人の大きな関心事であるだけでなく、社会全体で考えていかなければならない大きな課題である。

日本学術会議北海道地区会議では、この問題を市民と共に考える機会を設けるため、本年度の地区会議講演会のテーマを「高齢化社会の食と医療～心身の健康のために～」と決定し、国内で先進的に研究を続けている第一人者に、健康に高齢期を迎えるために、食事、睡眠、規則正しい生活など、日々の生活でどのように対応すべきかを教えていただくと共に、認知症をはじめとする高齢者の心身の諸問題とその対策について、講演していただくことにした。特に、本講演会を共催

する北海道大学は、現在、地域の特色を活かした「食」に関する産学官のプロジェクトを展開しており、「食と健康」はその中でも大きなテーマである。北海道は、食糧自給率が40%弱のわが国にあって、農業、水産業を含め約200%の自給率を持つ食糧生産の一大基地である。また、冷涼な気候を利用した食糧保存基地としても有望であり、国民のための食糧備蓄という国のリスクマネジメントの上でも国内で非常に重要な地位を占めている。避けられない高齢社会を豊かなものとするため、アカデミアが食を通じて、積極的に地域住民、さらには、国民全体の健康に関わっていく時代になっている。

本講演会では、高齢者だけでなく、一般市民や学生など、あらゆる年齢層の方々に、最新の情報を伝えると共に、健やかに豊かに年を重ねるために今何をすべきかを考えていただく機会とすることを目的とした。講演会当日は、11月に入ってしばらく穏やかな天候が続いていた札幌で、初めて10cmを超える積雪があり、降りしきる雪をかき分けて、熱心な市民が会場に詰めかけた。

講演会では、まず、日本学術会議を代表して、副会長の向井千秋先生から、フランクなお人柄がにじむ、暖かいご挨拶を頂いた。また、講演会を共催する北海道大学を代表して、理事・副学長の安田和則先生よりご挨拶をいただき、北海道大学における産学連携のイノベーション推進や北大病院を中心とした高度先進医療の取組など、アカデミアの新たな使命について紹介していただいた。



開会の挨拶をされる向井日本学術会議副会長

第1部「若さを保つ食と生活習慣」

北海道大学病院長の寶金清博先生の座長により、第1部では以下の2つの講演が行われた。

がんはどこまで予防できるのか

トップバッターは、北海道大学大学院医学研究科の浅香正博特任教授で、消化器内科の臨床医としての長年の研究・臨床の経験を踏まえ、がん、特に消化器のがんの予防について、最新データを交えての、高齢者にもわかりやすい、身近な例を引いてのご講演があった。一般市民へのメッセージを列挙すると、以下の通りである。1. がんは加齢と共に増える疾患であり、高齢化とがんは不可分であり、予防と早期発見・早期治療がカギを握る。2. がんの原因は、喫煙、生活習慣、感染症ではほぼ9割を占め、その中で感染症によるがんは最も確実に予防できる。3. 我が国の国民病とも言われてきた胃がんについては、ヘリコバクター感染によるものがほとんどであり、ヘリコバクターの除菌によって、ほぼ完全に予防が可能となった。我が国の早期胃がんの発見率と内視鏡治療をはじめとする早期胃がん治療は世界で抜kindんでおり、このため、我が国の胃がんの5年生存率は、欧米先進国でも20%そこそこであるのに対し、60%という高率である。4. 禁煙抜きの肺がん予防は不可能である。5. 肝炎による肝がん、パピロマウイルスによる子宮頸がんなど、感染症に関連したがんの予防に比較し、生活習慣に起因すると考えられるがんの予防は困難である。6. 様々な野菜を食物として摂取することが重要である。本講演を通じ、がんの予防に関するエッセンスをしっかりと得ることができた。



講演中の浅香北海道大学特任教授

生活習慣と健康—疫学研究から—

二人目の講演者である北海道大学医学研究科の玉腰暁子教授には、生活習慣と疾病、死因を前向きコホート研究によって明らかにし、高齢社会に向け、生活の指針を示す疫学研究の成果を示していただいた。特に、

喫煙による寿命へのリスクは単独でも強力であり、肥満、高血圧など他のすべてのリスクを予防しても予防しきれないこと、これに対し飲酒は少量であれば、むしろ寿命へはプラスに作用することなど、日頃の生活に密着した話題をわかりやすく示していただいた。また、がん予防と同様に、食事からの野菜を中心とした栄養摂取が重要であり、簡単にサプリメントとして、錠剤やドリンクで済ませるのは適切でないことも、がんの予防と共通であることが分かった。和食がユネスコの世界無形文化遺産に指定されたが、脂肪分が少なく、野菜の多い和食は、塩分を控えることでさらに健康的な食事としてみなされるべきであろう。

玉腰教授は、中高年者の健康関連要因に関する大規模コホートや各種職域コホートなどで、長い時間をかけてバイアスの入らない着実なエビデンスを得る疫学調査を多数行っており、今後、健康寿命を寿命に近づけるための更なる生活の指針が明確にされることに期待がかかる。



講演中の玉腰北海道大学教授

第二部「脳を守り、脳老化に挑む」

休憩をはさんで、後半の講演は、私が座長を務め、睡眠と脳老化、という脳に関連した講演を2名の講師にお願いした。

睡眠のはなし 良い眠りのために

日本大学医学部の内山 真教授からは、睡眠の意義、睡眠に関する誤解、睡眠障害による様々な疾患、そしてよい睡眠をとるコツなどについて、わかりやすく講演していただいた。睡眠時間と質については、日本人の5人に1人は睡眠困難や睡眠不足などの問題を抱えていること、世界で生じた大事故の多くで睡眠不足が原因であること、一方「8時間睡眠」説には誤解があり、成人では6～7時間台が最も長生きしており、自分にあった睡眠時間でよいことが分かった。また、睡眠不足は、高血圧、糖尿病、メタボリック症候群、うつ病など、多くの疾病のリスクとなるため、若年者も

日頃から十分な睡眠をとる習慣をつける必要がある。嗜好品については、アルコールは睡眠を浅くするので睡眠薬代わりに使うのは大きな間違いであること、ニコチンは覚せい作用のため睡眠を浅くすること、コーヒー、コーラ、緑茶、紅茶などは、カフェイン含有量が多く、就寝3～4時間前には摂取を控えるのが望ましいことが分かった。一方、高齢男性の早寝早起きが配偶者の睡眠を妨げるので、高齢夫婦は各自に合った睡眠時間を選択すればよいなど楽しい話もあり、日々の生活に役立つ話題が満載であった。

最後に、内山教授が中心となって策定し、2014年3月に厚労省から発表された「健康づくりのための睡眠指針」についても紹介があった。この指針のPDFファイルは、以下のサイトからダウンロード可能である。指針の最初に、講演でも紹介された「睡眠12箇条」も記載されており、ぜひ役立ててほしい。

<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000042749.html>



質問に答える内山日本大学教授

認知症の早期発見と予防

最後は、札幌医科大学の下濱俊教授に、認知症について講演をしていただいた。認知症有病率は昨年の厚労省発表によると、高齢者の15%であり、実に、426万人に上る。認知症では、記憶障害、判断力低下、見当識障害、言語障害、失行、失認などの中核症状のほかに、不安、抑うつ、興奮、徘徊、不眠、被害念慮、妄想などの周辺症状が反応性に伴うことがあり、単に物忘れが強いだけではない。また、物忘れのほかに、日時の概念が混乱したり、意欲減退あるいは怒りっぽくなるなど、自発性に変化が生じることが気づきのポイントとなる。また、認知症にはいくつかの種類があり、その60～70%がアルツハイマー型の認知症であるものの、脳梗塞や脳出血などの脳血管障害が原因となる血管性認知症が15～20%を占め、運動障害、言語障害などを伴うことがある。また、幻視や手足の震えがみられるレビー小体型認知症、記憶障害は比較的小さいが社会のルールや常識を無視した行動をとることの多い前頭側頭型認知症などもある。血管障害認知

症の様に、禁煙、血圧・血糖値・血漿コレステロールの管理などで、すぐにでも予防が可能な認知症もあり、認知症の種類、特徴を知ると早期発見、早期治療につながる。現在は、残念ながら、認知症の根本治療はないが、高血糖、高血圧、高脂血症、頭部外傷、精神的ストレスの持続などが危険因子である一方、知的活動、社会交流、適度な運動、適切な食事が予防因子となることも知られている。認知症の脳画像診断や、進行を遅くする薬の開発も、各国がしのぎを削っている。認知症の危険因子を避け、予防に努め、初期症状を見逃さず、早期発見と早期の治療開始を目指すことに全国民が心がければ、着実な効果は期待できる。



認知症について講演する下濱札幌医科大学教授

講演後は、総合討論に移った。市民からは、記憶力の維持のために、様々な脳トレーニング類が販売されているが、効果があるのだろうかなどの質問もあり、ストレスにならない程度の頭の体操と考え、むしろ、友人との交流、社会活動などに積極的に取り組むのが重要との回答があり、和やかに質疑が進んだ。認知症患者が施設で孤立せず、社会で暮らせるようにする試みも諸外国を中心に行われており、進行を遅らせる効果があることの紹介もあった。

また、野菜中心の適切な食事の重要性（ただし、サプリメントとしてではなく食事からの栄養摂取）、たばこの害、「適度な」アルコールは有益であることなどが、4名の講師による、がん、寿命、睡眠、認知症のいずれにも共通であることが分かり、参加者にとってのメッセージとなった。当日は、急な降雪にも関わらず、140名ほどの参加者が、最後の講演まで熱心に聞き入っており、市民の関心の高さをうかがわせた。



平成24年度実施の地区事業

○学術講演会

①平成 24 年 9 月 28 日（金）

帯広畜産大学講義棟（帯広市）

「食の安全とレギュラトリーサイエンス」

◇テーマ説明 日本学術会議連携会員，

帯広畜産大学学長 長澤 秀行

◇挨拶 日本学術会議副会長 春日 文子

◇講演

「食品分野のレギュラトリーサイエンス
の概念と役割」

日本学術会議連携会員，京都大学大学院
農学研究科教授 新山 陽子

「腸管出血性大腸菌（通称 O157）の病原性と進化」
帯広畜産大学副学長・教授 倉園 久生

◇パネルディスカッション

コーディネーター：

帯広畜産大学理事・副学長 金山 紀久

パネリスト：春日 文子，野口 伸（日本学術会
議会員，日本学術会議北海道地区会議
代表幹事，北海道大学大学院農学研究
院教授），新山 陽子，倉園 久生

②平成 25 年 3 月 1 日（金）

北海道大学学術交流会館小講堂（札幌市）

「アフリカに暮らす人たちとその環境

—北の大地からアフリカへの貢献—」

第一部

「アフリカの環境—緊急の研究課題はなにか？—」

◇趣旨説明 日本学術会議連携会員，北海道大学
大学院工学研究院教授 船水 尚行

◇講演

「Environmental Pollution in Africa:
Policing the Pollutants」

National Centre for Energy and
Environment, Energy Commission of
Nigeria

University of Benin

Professor Lawrence Ikechukwu Ezemonye

「Challenges of Water Management in Zambia: A
case of sanitation in Kanyama Peri-Urban area of

Lusaka and Copper-cobalt processing on the
Zambian Copperbelt」

University of Zambia

Professor Imasiku Anayawa Nyambe

「画一的開発モデルを超えて—アフリカの
政治システムを理解するための学際的アプローチ」
北海道大学大学院メディア・

コミュニケーション研究院准教授 鍋島 孝子

「Effect of mining activity on wild and domestic
animals: Case study of lead - zink mining area,
Kabwe, Zambia」

北海道大学大学院獣医学研究科講師
池中 良徳

第二部

「学術はどのようにアフリカに
貢献しようとしているか」

◇挨拶 北海道大学総長 佐伯 浩

◇テーマ説明 北海道大学ルサカオフィス所長，
大学院獣医学研究科教授 奥村 正裕

◇講演

「アフリカの人々が求める学術研究のために」
特定非営利活動法人アフリカ日本協議会理事
宮道一千代

「社会科学はアフリカとどう向かい合ってきたか」
日本学術会議連携会員，神戸大学大学院国
際協力研究科教授 高橋 基樹

「アフリカ諸国の環境汚染の現状と
共同研究の取り組み」

北海道大学大学院獣医学研究科教授
石塚真由美

「貧困問題への水・衛生からのアプローチ
—し尿の価値を高める技術とその導入戦略—」

日本学術会議連携会員，北海道大学大学院
工学研究院教授 船水 尚行

◇パネルディスカッション

トピック：「学術のチャレンジの方向性と展望」
モデレータ：佐藤のりゆき（フリーキャスター，北
海道大学創成研究機構客員教授）

パネリスト：奥村 正裕，宮道一千代，
石塚真由美，高橋 基樹，
船水 尚行

○北海道地区会議サイエンスカフェ

①平成 25 年 2 月 13 日（水）
三省堂書店札幌店（札幌市）

「体内時計と日照時間の関係や睡眠不足が引き起こす健康障害について あなたの時計は大丈夫ー体内時計で診る健康ー」

ゲスト：北海道大学大学院医学研究科特任教授
本間 さと

②平成 25 年 2 月 17 日（日）
紀伊國屋書店札幌本店（札幌市）

「地震の前に何かが起こる？
ー宇宙技術で探る大地のシグナルー」

ゲスト：日本学術会議北海道地区会議連携会員・
北海道大学大学院理学研究院教授
日置 幸介

○北海道地区会議運営協議会

①平成 24 年 7 月 5 日（木）北海道大学（札幌市）
議題 1 学術講演会について
②平成 24 年 11 月 30 日（金）持ち回り
議題 1 学術講演会について

○北海道地区会議科学者懇談会
平成 25 年 3 月 1 日（金）北海道大学（札幌市）

平成25年度実施の地区事業

○学術講演会
平成 26 年 3 月 13 日（木）
北海道大学学術交流会館講堂（札幌市）

「宇宙技術による "夢" の実現」

総合司会：氷見山 幸夫
（日本学術会議会員，日本学術会議北海道地区会議
運営協議会委員，北海道教育大学教育学部教授）

◇挨拶 日本学術会議副会長 家 泰弘
◇挨拶 北海道大学理事 鑄山 賢一
◇講演

「やれる理由を見つけて挑戦しなければ，
成果は得られない。」

日本学術会議会員，独立行政法人宇宙航空研究開
発機構宇宙科学研究所宇宙飛行工学研究系教授
川口淳一郎

「マイクロサテライトが起こす宇宙情報革命」
北海道大学大学院理学研究院教授 高橋 幸弘
「地球環境観測ー宇宙からの目」
独立行政法人宇宙航空研究開発機構地球観測
研究センター長 福田 徹
「宇宙から海を探る：衛星データのスマート水産業
への利活用」
日本学術会議連携会員，北海道大学大学院水産
科学研究院教授 齊藤 誠一

○北海道地区会議サイエンスカフェ

①平成 26 年 2 月 15 日（土）
北海道教育大学旭川校（旭川市）

「フューチャー・アースー未来の地球」への
地域からの取り組みを考える」

講師：日本学術会議会員，日本学術会議北海道地区会
議運営協議会委員，北海道教育大学教育学部
教授 氷見山幸夫

②平成 26 年 3 月 29 日（土）
三省堂書店札幌店（札幌市）

「空にある“水”のふしぎー雲・雨・雪からわる
地球温暖化ー」

講師：北海道大学地球環境科学研究院教授
山中 康裕

○北海道地区会議運営協議会

①平成 25 年 4 月 18 日（木）北海道大学（札幌市）
議題 1 平成 25 年度事業計画について
議題 2 地区会議ニュース NO.45 の発行について
議題 3 その他
報告 1 平成 24 年度事業実施報告について
報告 2 その他
②平成 25 年 11 月 26 日（火）持ち回り
議題 1 学術講演会について

○北海道地区会議科学者懇談会

平成 26 年 3 月 13 日（木）北海道大学（札幌市）
※家副会長を囲んで

平成26年度実施の地区事業（実施分）

○学術講演会
平成 26 年 11 月 14 日（金）

北海道大学学術交流会館小講堂（札幌市）

札幌医科大学医学部教授 下濱 俊

「高齢化社会の食と医療～心身の健康のために～」

◇挨拶 日本学術会議第二部会員，日本学術会議北海道地区会議代表幹事，北海道大学理事・副学長 上田 一郎

司会：本間 さと

（日本学術会議第二部会員，日本学術会議北海道地区会議運営協議会委員，北海道大学大学院医学研究科特任教授）

◇挨拶 日本学術会議副会長 向井 千秋
◇挨拶 日本学術会議連携会員，北海道大学理事・副学長 安田 和則

○北海道地区会議サイエンスカフェ

平成 27 年 2 月 28 日（土）

三省堂書店札幌店（札幌市）

「水がまわれば暮らしもまわる

～開発途上国の貧困をトイレから解決～」

第一部「若さを保つ食と生活習慣」

◇座長 日本学術会議第二部会員，北海道大学病院長 寶金 清博

◇講演

「がんはどこまで予防できるのか」

北海道大学大学院医学研究科特任教授 浅香 正博

「生活習慣と健康－疫学研究から－」

北海道大学大学院医学研究科教授 玉腰 暁子

ゲスト：日本学術会議連携会員，北海道大学大学院工学研究院教授 船水 尚行

○北海道地区会議運営協議会

①平成 26 年 6 月 27 日（金）北海道大学（札幌市）

議題 1 平成 26 年度事業計画について

議題 2 その他

報告 1 平成 25 年度事業実施報告について

報告 2 その他

②平成 26 年 10 月 29 日（水）北海道大学（札幌市）

議題 1 学術講演会について

議題 2 その他

第二部「脳を守り，脳老化に挑む」

◇座長 日本学術会議第二部会員，日本学術会議北海道地区会議運営協議会委員，北海道大学大学院医学研究科特任教授 本間 さと

◇講演

「睡眠のはなし 良い眠りのために」

日本大学医学部教授 内山 真

「認知症の早期発見と予防」

○北海道地区会議科学者懇談会

平成 26 年 11 月 14 日（金）北海道大学（札幌市）

※向井副会長を囲んで

北海道地区会議運営協議会委員紹介

第 23 期日本学術会議北海道地区会議の運営委員を紹介します。

氏名 上田 一郎（うへだ いちろう）	第二部会員（北海道地区会議代表幹事）
	所属・職名 北海道大学理事・副学長
	所属委員会（日本学術会議） 農学委員会，農学委員会植物保護分科会，IUMS 分科会，アジア学術会議分科会
	研究分野（研究テーマ） 植物病理学，ウイルス学 （作物の植物ウイルスに対する抵抗性のメカニズム） （植物ウイルスの病原性）

氏名	加藤 昌子 (かとう まさこ)	第三部会員
	所属・職名	北海道大学大学院理学研究院・教授
	所属委員会 (日本学術会議)	化学委員会
	研究分野 (研究テーマ) ・発光性クロミック金属錯体の構築と機構解明 ・3d 金属錯体を活用した光水素発生触媒系の開発 ・発光性金属錯体の構築と発光状態の解明	

氏名	仲 真紀子 (なか まきこ)	第一部会員
	所属・職名	北海道大学大学院文学研究科・教授
	所属委員会 (日本学術会議)	心理学・教育学委員会, 心の先端研究と心理学専門教育分科会, 社会のための心理学分科会, 法と心理学分科会
	研究分野 (研究テーマ) 認知心理学, 発達心理学, 法と心理学 ・子どもの認知発達。特に, 記憶, 言語, コミュニケーションの発達 ・目撃者, 被害者, 被疑者への面接法	

氏名	氷見山 幸夫 (ひみやま ゆきお)	第三部会員
	所属・職名	北海道教育大学教育学部 (旭川校)・教授
	所属委員会 (日本学術会議)	地球惑星科学委員会, 地域研究委員会, 環境学委員会, 科学者委員会, フューチャー・アースの推進に関する委員会
	研究分野 (研究テーマ) 地球惑星科学 (特に地球人間圏科学, 持続性科学) 地理学 (特に比較文化, 環境地理学, 土地利用・土地被覆変化) 地理教育 (特に環境地図教育, 地域理解教育) 環境教育 (特に ESD, グローカル環境教育) 生涯教育 (特に環境教育における)	

氏名	寶金 清博 (ほうきん きよひろ)	第二部会員
	所属・職名	北海道大学病院長
	所属委員会 (日本学術会議)	臨床医学委員会
	研究分野 (研究テーマ) 脳卒中の外科治療, 脳血行再建術, もやもや病の外科治療, 脳虚血の基礎・臨床研究, 磁気共鳴画像法, 医療安全・医療倫理	

氏名	本間 さと (ほんま さと)	第二部会員
	所属・職名	北海道大学大学院医学研究科・特任教授
	所属委員会 (日本学術会議)	基礎医学委員会, 機能医科学分科会, 神経科学分科会, IUPS 分科会
	研究分野 (研究テーマ) 環境生理学, 時間生物学 (生体リズム・睡眠覚醒の研究), 神経科学 (視床下部・自律神経機能, 中枢時計機構の研究), 発光・蛍光イメージング (時計遺伝子発現の in vivo, ex vivo モニタリング)	

氏名	長澤 秀行 (ながさわ ひでゆき)	連携会員
	所属・職名	帯広畜産大学・学長
	所属委員会 (日本学術会議)	農学委員会, 食の安全分科会, 獣医学分科会
	研究分野 (研究テーマ) ・ 原虫感染に対する宿主免疫機構の解析 ・ 病原体の宿主免疫機構からのエスケープに関する研究 ・ 食の安全に係る人材育成に関する研究 ・ 大学経営に関する研究 ・ 国際水準の獣医学教育に関する研究	

氏名	中島 秀之 (なかしま ひでゆき)	連携会員
	所属・職名	公立はこだて未来大学 理事長・学長
	所属委員会 (日本学術会議)	情報学委員会
	研究分野 (研究テーマ) 人工知能の研究とその社会応用, 「スマートシティはこだて」の一環として新しい公共交通システムのデザインとサービス実践, 情報学の構成的研究手法の定式化 主要編著書: Handbook of Ambient Intelligence and Smart Environments (Springer), 知能の謎 (講談社ブルーバックス), 岩波講座認知科学 8「思考」(岩波書店), Prolog (産業図書)	

氏名	西村 正治 (にしむら まさはる)	連携会員
	所属・職名	北海道大学大学院医学研究科・教授
	所属委員会 (日本学術会議)	臨床医学委員会 (呼吸器学)
	研究分野 (研究テーマ) 慢性閉塞性肺疾患 (COPD) および喘息の病因, 病態, 治療 呼吸病態生理学	

氏名	船水 尚行 (ふなみず なおゆき)	連携会員
	所属・職名	北海道大学大学院工学研究院・教授
	所属委員会 (日本学術会議)	土木工学・建築学委員会
	研究分野 (研究テーマ) (1) 持続可能なサニテーションシステムに関する研究 (資源回収型排水分離分散排水処理, アフリカサヘル地域, インドネシアスラムを対象としたサニテーションシステム) (2) 排水再利用に関する研究 (再生利用水の安全性評価) (3) サステナビリティ学教育プログラムに関する活動 (サステナビリティ学の国際教育プログラムに関する調査・研究, JICA 研修プログラムの実施)	

氏名	山中 康裕 (やまなか やすひろ)	連携会員
	所属・職名	北海道大学大学院地球環境科学研究院・教授
	所属委員会 (日本学術会議)	地球惑星科学委員会
	研究分野 (研究テーマ) 海洋科学 (物質循環・生態学・古海洋に対するモデリング) 地球温暖化 (影響に関する自然科学, 緩和策に関する社会科学) 環境科学 (持続可能な地域づくり・科学技術コミュニケーション)	

第23期地区会議構成員

(平成 26 年 10 月 1 日現在)

第 23 期北海道地区会議構成員は会員および連携会員で構成されている。

[会 員]

上 田 一 郎	第二部会 (北海道大学理事・副学長)
加 藤 昌 子	第三部会 (北海道大学大学院理学研究員 教授)
仲 真紀子	第一部会 (北海道大学大学院文学研究科 教授)
氷見山 幸 夫	第三部会 (北海道教育大学教育学部 教授)
寶 金 清 博	第二部会 (北海道大学病院長)
本 間 さ と	第二部会 (北海道大学大学院医学研究科 特任教授)

[連携会員]

有 賀 早 苗	北海道大学大学院農学研究院 教授
石 田 晋	北海道大学大学院医学研究科 教授
石 塚 真由美	北海道大学大学院獣医学研究科 教授
伊 藤 茂 男	北海道大学大学院獣医学研究科 特任教授
上 田 宏	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター 教授
白 杵 勲	札幌学院大学人文学部人間科学科 教授
大 貫 惣 明	北海道大学大学院工学研究院 特任教授
小野江 和 則	老人保健施設えん施設長・理事, 北海道大学 名誉教授
帰 山 雅 秀	北海道大学国際本部 特任教授
加 藤 幾 芳	北海道大学名誉教授
蟹 江 章	北海道大学大学院経済学研究科 教授
川 村 周 三	北海道大学大学院農学研究院 教授
岸 玲 子	北海道大学環境健康科学研究教育副センター長, 特任教授
岸 浪 建 史	室蘭工業大学監事・工学博士
小 柴 正 則	北海道大学学務部キャリアセンター 特任教授
佐 伯 和 子	北海道大学大学院保健科学研究院 教授
坂 井 文	北海道大学大学院工学研究院 准教授
笹 谷 春 美	北海道教育大学 名誉教授
佐 藤 典 宏	北海道大学病院 教授
進 藤 正 信	北海道大学大学院歯学研究科 教授

杉 本 敦 子	北海道大学大学院地球環境科学研究院 教授
鈴木 賢	北海道大学大学院法学研究科 教授
高 橋 保	北海道大学触媒化学研究センター 教授
但 野 茂	北海道大学大学院工学研究院 教授
田 中 勲	北海道大学大学院先端生命科学研究科 特任教授
玉 木 長 良	北海道大学大学院医学研究科 教授
玉 城 英 彦	北海道大学国際本部 特任教授
津 田 一 郎	北海道大学電子科学研究所 教授
堤 裕 幸	札幌医科大学医学部 教授
寺 尾 宏 明	北海道大学大学院理学研究院 教授
戸 塚 靖 則	北海道大学 名誉教授, 東札幌病院 口腔外科部長
長 澤 秀 行	帯広畜産大学 学長
中 島 秀 之	公立はこだて未来大学 学長
新 川 詔 夫	北海道医療大学 学長
西 村 正 治	北海道大学大学院医学研究科 教授
野 口 伸	北海道大学大学院農学研究院 教授
長谷山 美 紀	北海道大学大学院情報科学研究科 教授
原 登志彦	北海道大学低温科学研究所 教授
晴 山 雅 人	総合南東北病院陽子線治療研究所 所長, 札幌医科大学 名誉教授
平 野 高 司	北海道大学大学院農学研究院 教授
福 井 学	北海道大学低温科学研究所 教授
藤 田 修	北海道大学大学院工学研究院 教授
伏 谷 伸 宏	一般財団法人函館国際水産・海洋都市推進機構長
船 水 尚 行	北海道大学大学院工学研究院 教授
日 置 幸 介	北海道大学大学院理学研究院 教授
逸 見 勝 亮	北海道大学名誉教授
本 間 研 一	北海道大学大学院医学研究科 客員教授
馬 渡 駿 介	北海道大学名誉教授
身 崎 壽	北海道大学名誉教授
三 澤 弘 明	北海道大学電子科学研究所長・教授
緑 川 光 正	北海道大学大学院工学研究院 教授
南 雅 文	北海道大学大学院薬学研究院 教授
美 馬 のゆり	公立はこだて未来大学 教授
安 田 和 則	北海道大学 理事・副学長
山 口 佳 三	北海道大学長
山 中 康 裕	北海道大学大学院地球環境科学研究院 教授
渡 辺 雅 彦	北海道大学大学院医学研究科 教授
亘 理 格	北海道大学大学院法学研究科 教授

(氏名は五十音順)

